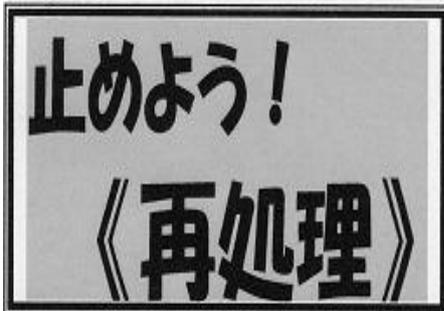


三陸の海を放射能から守る
岩手の会 (略称) **三陸の海・岩手の会**
 郵便振替 02240-5-102650
 ホームページ [再処理/岩手の環境/RI](#)
[廃棄物 \(coccan.jp\)](#)
 本紙は市民カンパで発行しています。
 購読したい方は事務局に連絡下さい



《天恵の海》
 2024(令和 6年)12月27日
 第261号
【3.11と女川原発】特集
 編集事務局 S.Oshida
 TEL・FAX 019-623-1636

3.11での女川原発敷地内 放射線量急上昇 建屋内からの漏洩が原因だった

—東北電力 私達の根拠に反論出来ず—

記者説明会



宮城県庁
 県政記者クラブ

口頭回答



市民側
 三陸の海・岩手の会
 宮城 風の会



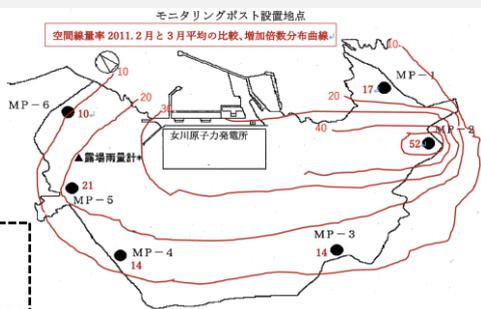
東北電力本社会議室
 対応者 広報部・原子力部

市民団体が東北電力に送付した「東日本大震災時女川原発のモニタリングポスト(MP)の線量急上昇他に係る質問書」について一月一八日東北電力本社で口頭回答がなされました。東北電力は「原発各機は冷温停止していた。福島第一原発事故の影響と思われる。排気筒のモニターが少し上昇しただけ」と回答。私達は「漏洩は外れたブローアウトパネル等からであったはず」と指摘し、東北電力のデータなどに基づき女川原発建屋から放射能漏洩が発生したとする科学的根拠(三つの論点)を提示しました。私達の指摘と論点に東北電力からは全く反論が行われず、同じ回答を繰り返すばかりでした。これは反論出来る根拠がないためです。私達は「女川原発内の事故により漏洩した放射能により敷地内空間線量率が急上昇したものとみなす」と判断するに至りました。

「三つの論点」に 回答なし

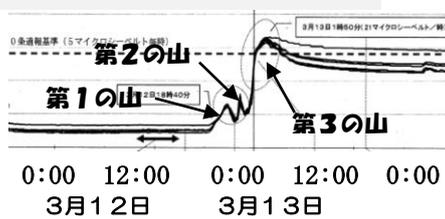
私達の公開質問書は、震災時に東北電力が公表した女川原発の「緊急情報」と「女川原子力発電所 環境放射能及び温排水調査結果(宮城県)」のデータを精査し、「福島原発からのプルームでは説明出来ない、女川原発建屋自身の放射能漏洩が疑われる」とするものでした。私達の、総合的な「三つの論点」について、電力側は会談時間を30分にするなどの姿勢でしたが、時間は50分まで延長されました。

第2図：マップ 女川原発敷地内各MP設置地点
 空間線量率 2011. 2月と3月平均値増減倍数比較



論点1 データ

第1図 2011. 3. 12~13
 女川原発敷地内MP値グラフ



論点2
 データ

「口頭回答」報告
 その論拠…三つの論点
 論点1…空間線量率の
 グラフの形がおかしい。
 プルームが去ると降雨
 がなければ低減してゆ
 くのだが、高い値が継続
 していたこと。(第1図)

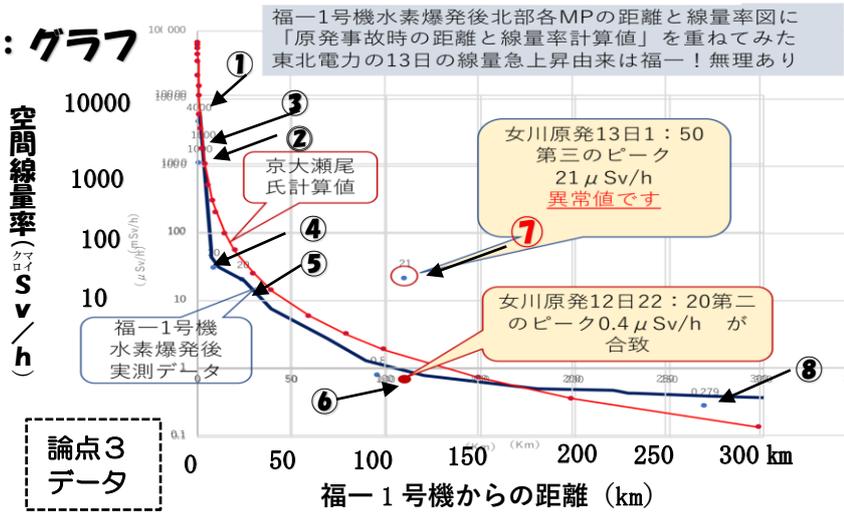
第2図：表 女川原発3.11直前直後の月線量比較 単位 nGy/h

	2月(事故直前月)			3月(事故発生月)			3月は2月の何倍か (b)/(a)
	最大	(a) 空間線量 平均値	最小	最大	(b) 空間線量 平均値	最小	
MP-1	49	35	33	19000	608	33	17.4
MP-2	46	30	28	21000	1567	27	52.2
MP-3	53	34	31	17000	465	31	13.7
MP-4	54	33	30	16000	475	31	14.4
MP-5	55	34	32	17000	696	30	20.5
MP-6	68	48	45	14000	468	45	9.8

論点2…原発敷地内
 P-2を中心に汚染が
 広がっている。
 大震災当月の空間線量
 率の「三月の平均値」を
 震災前の「二月の平均値」
 と比べると増大が著し
 い。特にMP-2が最も
 高く、その周辺に放射能
 汚染が広がっているの
 がわかる。(第2図：表)

第3図 福島原発1号機水素爆発ブルームのデータ

A: グラフ



論点3 データ

B: 表 プルームの風下各地点の距離と実測

測定地点	福一1号機からの距離 (km)	空間線量率測定値 (μSv/h)
① 福一6号機MP	0.7	4000
② 福一MP-4	1.1	1000
③ 双葉町郡山MP	3	1600
④ 浪江町幾世橋	8.5	30
⑤ 南相馬市	24.0	20
⑥ 東北大病院	95.6	0.8
⑦ 宮城県女川原発	120.0	21
⑧ 岩手滝沢市RMC	269.0	0.279

市民(宮城・風の会) 負圧である原発建屋に、ブルームがどう外部から入り、排出筒からフィルターを通ってどのように出て行ったのか?それがグラフで読み取れるか知りたい。

一月と三月の敷地内月平均空間線量を比較するとMP2の52倍からMP6の約10倍と高いのに、敷地外の積算線量計での両月平均比は10倍を超える地区はなく、3〜7倍であり、MP2から離れるほど低かった。

女川原発敷地内MPの線量率上昇が福島第一原発事故の水素爆発等のブルームであるなら移動距離によって低減する。例えばMP2の21μSv/hはあまりに高過ぎて異常値である。(第3図) これにより、女川原発敷地内で放射能漏れがあったとの結論に至りました。

口頭回答を聞き、市民がうなづいた経緯を窺

当会ホームページ掲載資料 URL

- ◎「東日本大震災時女川原発のMPの線量急上昇他に係る質問書」3市民団体
<http://sanriku.my.coocan.jp/241118Q&A&C.pdf>
- ◎「東日本大震災女川原発で、放射線量急上昇はやはり女川原発起原だった」三陸の海・岩手の会
[2412東北電力回答まとめ 宮城風の会「鳴り砂\(原稿\)」](http://2412東北電力回答まとめ 宮城風の会「鳴り砂(原稿)」)

女川原発の被災・事故INES「レベル2」

東日本大震災の後、女川原発の被災事故について、当時の政府(原子力・安全保安院)は、INES(国際原子力事象評価尺度)レベル2:異常事象として発表しました。しかし現在ほとんどの人々は知っていません。その発災日は三月二十九日になっ

ブルームの水めがね

東日本大震災の時私たちは、INESレベル7の巨大事故だった福島第一原発事故を目撃し、驚愕、事故拡大に肝を冷やした。3・11原発事故はまだ終わっていない。危険も去っていない。一方宮城県女川原発でも地震・津波の襲来で巨大事故寸前に至ったが、間一髪、紙一重の差で破滅的事態を免れた。女川原発は震度6弱の大地震で敷地は1m地盤沈下し、そこに波高13mの津波が襲来、実に海抜0.8mの差で直撃を免れた(その時刻は干潮だった!)。五つの外部電源のうち四回線が途絶、残りの一回線で原子炉施設の冷却を支えた。1号機タービン建屋地下1階で高圧電源盤の火災が発生、約八時間後に鎮火。2号機建屋地下三階に一九〇〇トンの海水が浸入し冷却水ポンプが水没。3号機ではタービン建屋ブローアウトパネルが外れた。しかし制御棒が正常

に作用し、翌二二日午前一時頃までに「冷温停止」となった。その日の日中、福島原発では水素爆発が発生し放射性物質が飛散、風に乗ってブルームとなつて移動した。深夜に女川付近に達し、女川原発MPに第二の山(第1図)を残した。◆問題は第三の山である。同時に女川原発建屋からの放射能漏洩れがあったと推察出来る。何があったか、電力は知っているはずだ。女川原発敷地内MPの三月の平均値が、二月の平均値に比して、五・二倍を最高に、すべて一〇倍以上であった。敷地外では三カ所中7カ所が津波被害を幸い免れて、その積算線量がわかったが、原発敷地外数値は、三月は二月の2.8倍〜6.7倍で、敷地内より低かった。◆女川原発敷地内MPの線量急上昇は福島事故原発のブルームによるとする三月一三日の国と東北電力の発表は事故の隠ぺいではないか。国と電力は真実を明らかにすべきだ。(尚)